

平成 25 年度 ADCA 地方セミナー

「海外農業農村開発に求められる人材」

結果報告書

平成 26 年 2 月

一般社団法人海外農業開発コンサルタント協会

1. 概要と目的

現在、世界人口の60%以上が農業に従事しており、その中でも開発途上国では貧困層の4人のうち3人が農村地域に居住し、生計を農業に依存していると言われています。更に近年、人口の増加や気候変動等に起因する環境問題やガバナンス等このような地域で取り組むべき問題も複雑化・多様化しております。また、エネルギー生産への穀物利用の拡大から穀物価格が高騰し、世界の食料事情が厳しい状況になりつつあります。

これらの厳しい事情に対応するべく、我が国の開発途上国への政府開発援助（ODA）の基本方針は、貧困削減のための農業・農村開発分野の協力を重視しており、生産力向上などの農業農村開発を効果的・効率的に実施するために、開発途上国の政策や援助需要を踏まえつつ、我が国の経済社会発展や経済協力の経験を途上国の開発に役立てるとともに、我が国が有する優れた技術、知見、人材及び制度を活用し、貧困削減についてのプログラムを展開しております。

当会では毎年世界の農業農村開発の展開について国際協力の関係者（JICA 等国际協力実施機関、大学等研究機関、コンサルタント、ゼネコン、NGO 等）と今後の可能性、方向性について、我が国の農業農村開発協力の実績を振り返りながら、共に考える事を目的にセミナーを開催してきました。

本セミナーは、国際協力に従事する様々なプレーヤーが存在する中、途上国において農業・農村開発に従事する本邦コンサルタントの立ち位置、活動実態を正しく社会に発信し、次世代のコンサルタントとなり得る学生たちに農業・農村開発コンサルタントの魅力、やりがい伝えることを開催の主旨として挙げております。また参加者に対して、講演や協力事例報告、パネルディスカッションを通じて、世界における農業や食料事情を提供し、我が国のODAにおける農業農村開発への理解を促進させることを目的に実施するものであります。

2. 開催日時

平成25年10月26日（土）13:00～17:20（会場受付開始12:30）

3. 開催場所

鳥取大学 湖山キャンパス 共通教育棟 A20 大講義室
（〒680-8550 鳥取県鳥取市湖山町南 4-101）

4. 対象

農業・農村開発、工学、社会科学系に興味を持つ学生および、技術者（民間企業、地方公共団体）

5. 主催者

一般社団法人海外農業開発コンサルタンツ協会（ADCA）

6. 共催者

鳥取大学

7. 後援者

独立行政法人 国際協力機構、農林水産省、公益社団法人 農業農村工学会

8. プログラム

13:00-13:05 開会挨拶 海外農業開発コンサルタント協会 副会長 久野 格彦

13:05-13:10 共催者挨拶 鳥取大学理事・副学長 中島 廣光

13:10-13:15 来賓挨拶 農林水産省 中国四国農政局 設計課長 青山 健治

第 1 部 講演

13:15-14:15 基調講演：「アフリカにおけるネリカ米栽培技術の確立と普及手法」
坪井 達史 (JICA ウガンダ専門家 稲作上級アドバイザー)

14:15-15:00 講演：「アフリカの経験から思うこと」
野坂 治朗 (ザンビア国 農業牧畜省 農業・農村開発アドバイザー、
鳥取大学農学研究科 1993 年博士号取得)

— 休憩 — (30分)

第 2 部 現場からの報告

15:30-16:15 報告：「東南アジアにおける研究・教育の経験から」
安延 久美 (鳥取大学 農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 准教授)
報告：「ルワンダ国における農業・農村開発コンサルタントの役割」
荒川 英孝 (株式会社三祐コンサルタント 海外事業本部 企画推進部
企画推進課 課長)
報告：「短期 JOCV に参加して」
辻本 和紀 (鳥取大学大学院 修士 1 年生)

第 3 部 パネルディスカッション

16:15-17:15

パネリスト： 坪井 達史、野坂 治朗、鍋田 肇 (鳥取大学 乾燥地研究センター 准教授)
長井 宏治 (NTC インターナショナル株式会社 企画本部)、
渡邊 直人 (株式会社オリエンタルコンサルタント GC 事業本部)

モデレーター： 西牧 隆壯 (東京農業大学 客員教授)

17:15-17:20 閉会挨拶 国際協力機構 中国国際センター 所長 西宮 宜昭

9. 参加人数

事前申し込み : 52 名
当日申込み : 151 名
計 : 203 名

10. 成果

【基 調 講 演】

「アフリカにおけるネリカ米栽培技術の確立と普及手法」

坪井 達史

(JICA ウガンダ専門家 稲作上級技術アドバイザー)

JICA の専門家として、2004 年から現在までウガンダの試験場を拠点に東南部アフリカ諸国のネリカ普及に携わっている坪井氏が講演を行った。

TICAD IV において、10 年間でアフリカのコメ生産量を倍増する CARD イニシアチブが立ち上げられたが、その目標達成に貢献するのがネリカ米であると考えられる。ネリカ米の特徴としては、1) 陸稲であるため、水田整備の費用がかからない他、Mixed Crop や Inter Crop Cultivation に適している、2) 多収量を上げるポテンシャルが高く、生産性の増大が期待できること、3) 生育期間が短いため、雨季が短い地域でも収穫が安定する、4) 水田状態でも栽培できるため、低湿地で、他の作物が栽培できない時期の裏作に適している、などが上げられる。

ネリカ米 (NERICA) は、NEW RICE FOR AFRICA の略称であり、アジア種とアフリカ種を交配させたものである。種が異なる作物の交配で作った作物は、本来、簡単には種を付けないが、1992 年にコートジボワールの西アフリカ稲開発協会 (現アフリカ稲センター、WARDA) で最初に 3 粒の籾が作られたところから、ネリカ米の歴史が始まった。更なる品種改良の結果、今では、陸稲 18 品種、水稲 60 品種にまで増えており、ウガンダや、エチオピアなど、アフリカの各国で栽培試験と作付指導を行って実績を上げてきている。

ウガンダでは、3 品種を奨励品種として選定して栽培しているが、選定にあたっては、個々の品種の栽培特性の他に、農家が見た目で種籾を判別できることを重要と考えた。これらの品種について、水要求量、土壌条件、気候条件等に照らし合わせて栽培適地を選定し、普及を行って来ている。現地の研究者や農家は、もともとコメを育てた経験が無いため、本当に基本的なことから指導していく必要がある。研究者に対しては、試験圃場では直線的に播種することから指導を始めなければならなかった。農家や普及員の研修にあたっては、種まきの深さや栽植密度、畝幅、播種方法、除草の回数等、試験圃場での栽培結果を写真や現地視察で実際に見せ、その効果を実感させられるよう工夫している。また、初めから農家が援助に依存しないよう、先ず農家自身に種籾を用意してもらって、初めて研修を実施する。研修にあたっては、農家に 1kg のネリカ米の種籾を渡し、技術指導を行ってコメを生産してもらおう。次の年、50kg のコメができたら、100% の利子を付けて、2kg の種籾を返してもらおう。ただし、実際に回収するのは困難であるため、近隣の農家に当該量を配るようお願いしている。50kg のコメができない農家に対しては、残念ながら、コメを生産する能力がないと伝えている。

ウガンダでは青年海外協力隊 (JOCV、コメ隊員と呼んでいる) のメンバーも頑張っている。コメ隊員のほとんどは、赴任するまでコメ生産の経験がないが、簡単な作業なので、少し教えれば、すぐに対応できる。

ポストハーベスト処理については、簡単な脱穀機を作成できるよう、地元の工場の人材を訓練

したり、トラックの上に精米器を搭載した移動精米所を準備したりして対応した。移動精米所は、当初、大変重宝がられたが、最近では精米所も多く設立されており、活躍する機会が減っている。今では、主に精米器のオペレーターに対するトレーニングを行っている。

こういった活動の成果だけではないが、ウガンダに赴任した 2002 年当時、8,000 トンしかなかった陸稲の生産量が、2009 年には 53,000 トンまで増えてきている。また、当時ウガンダには稲作の専門家がいなかったが、今では JICA の長期研修などで育成された人材もおり、2010 年には研修センターもでき、東アフリカの研究・普及の拠点となっている。

アフリカで、稲作を普及するにあたって、ひとつ気をつけていることがある。それは、現地の作物生産の体系を崩さないこと。ウガンダでは、食事の時、サツマイモ、キャッサバ、アボカド、メイズ、マトケ（バナナ）が主食として供されるが、これはウガンダの農家の畑そのものであり、農家はそれぞれにこういった作物を織り交ぜて栽培している。アジアでは、コメ中心の農業が一般的だが、アフリカではコメはあくまでも“one of them”であることを認識しなければならず、既存の営農体系を 100%コメにしてしまう、というようなことは厳に避けなければならない。アジアとアフリカの稲作は違う。このことは、是非関係者の皆さんに理解して頂きたいところである。

いろいろ話したが、これまで 8 年間この仕事に携わってきたが、まだ、多くの仕事があると考えている。学生の皆さんが卒業されるときでも、まだまだ間に合う状況である。実に楽しい仕事なので、興味のある人には、是非相談に乗りたいと思っている。

【講演】

「アフリカの経験から思うこと」

野坂 治朗

(ザンビア国農業畜産省 農業・農村開発アドバイザー)

講演会場である鳥取大学で学位を取得された野坂氏は、一般講演者の立場を越え、受講者にとってより身近な先輩という立場からお話をされた。講演内容は大学卒業後のご自身の経歴から始まり、海外農業農村開発事業の必要性、JICA が実施している国際協力活動の紹介、開発コンサルタント業界の活動紹介、ご自身が開発コンサルタントとして携わられた事業の紹介、海外農業農村開発に求められる人材と多岐に渡った。

特に本セミナーの中心的話題である海外農業農村開発に求められる人材については、人材の必要性から、人材育成に向けた大学に求められる取り組みや、大学・産業界との連携した取り組み、個人に求められる素養や能力、その素養や能力を養うために必要な個人の取り組み等を詳細にご紹介頂いた。業界のやりがいや達成感のみではなく、その事業を成功させるため、人材に求められる高い能力や素養といった、難しさ、厳しさについてもご発表を頂いた。

また、講演の最後には先輩から後輩に向けたエールとして、学生時代の個人の可能性は非常に大きく広がっていること、そして、その可能性を活かすために今から実践すべき事として、将来について真剣に考える事、夢を持つ事、自分の可能性を信じる事、行動する事をご提言いただいた。

【現場からの報告】

第二部では、研究者、コンサルタント、JOCV の 3 者がそれぞれの立場から、海外農業農村開発の現場経験に基づく、海外で活躍するために求められる素養等について発表を行った。

「東南アジアにおける研究・教育の経験から」

安延 久美

(鳥取大学 農学部 生物資源環境学科 国際環境科学 准教授)

鳥取大学の安延久美氏は、「東南アジアにおける研究・教育の経験から」をテーマに、自身の経験を振り返り、数少ない女性の研究者として一步を踏み出した後、経験してきたこと、農業農村開発における社会科学の重要性、研究職と大学における調査研究の違い、現場においてどのような事に配慮したかなどについて発表を行った。

「ルワンダ国における農業・農村開発コンサルタントの役割」

荒川 英孝

(株式会社三祐コンサルタンツ海外事業本部 企画推進部 企画推進課 課長)

三祐コンサルタンツの荒川英孝氏は、アフリカのルワンダ国で実施された JICA 技術協力プロジェクトの事例を主とする「農業・農村開発コンサルタントの役割」をテーマに、プロジェクトの人員構成や現場での日々の業務など、プロジェクトの業務内容に加え、日常の暮らし（生活）等、コンサルタントの海外滞在時の様子について紹介を行った。

「短期 JOCV に参加して」

辻本 和紀

(鳥取大学 修士 1 年生)

最後に、鳥取大学修士課程に在籍の辻本和紀氏より、「短期 JOCV（青年海外協力隊）に参加して」というテーマで、自身が大学 4 回生の時にどのように将来のキャリアパスを考え短期 JOCV に応募したか、任地ウガンダでの活動内容、生活状況、戸惑った事などを説明し、自信が感じた海外の農業・農村開発の現場で必要とされる技術、能力について報告を行った。

【パネルディスカッション】

モデレーター： 西牧 隆壯（東京農業大学 客員教授）

パネリスト： 坪井 達史、野坂 治朗、鍋田 肇（鳥取大学 乾燥地研究センター 准教授）
長井 宏治（NTC インターナショナル株式会社 企画本部）、
渡邊 直人（株式会社オリエンタルコンサルタンツ GC 事業本部）

パネルディスカッションでは東京農業大学客員教授の西牧隆壯氏の進行の下、第1部講演者に加え、鳥取大学乾燥地研究センター准教授の鍋田肇氏およびADCA会員企業の2名が参加した。まず始めにパネルディスカッションから新たに参加した3名が、各人の経歴、国際協力の道を目指したきっかけ、失敗経験とそこから得た教訓などについて語り自己紹介を行った。

地方セミナー参加者からパネリストへの質疑応答という形で討議が行われ、アフリカ・中東各国から参加していたJICA研修生からは講演内容に関する更なる具体的な質問や、日本の国際協力についての方法方針に関する質問が行われた。また鳥取大学学生及び教員よりコンサルタントの業務内容やコンサルタントとして必要な素養について等の質問が行われた。各質問に対してパネリストによる実体験を踏まえた回答がなされた。中でも、積極性や行動力、そして失敗を恐れずに前向きに物事に取り組む姿勢を持つことが海外農業農村開発に携わる人材として大切であると各パネリストからアドバイスがあった。活発な質問、議論が展開されセミナーは盛況のうちに終えた。